短歌文法十講

短歌文法十七講

著共 介蝶田生
仁本松

書叢考參歌作介蝶田生

第四編

立命館大學出版部

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月廿日發行
昭和六年二月廿日八版

短歌文法七十講
定價貳圓貳拾錢

著者　生田蝶介

發行者　東京市京橋區銀座西二ノ一
立命館大學出版部
竹上孝太郎

印刷者　東京市京橋區鈴木町二
石丸祐正

東亞印刷株式會社

發行所　東京市京橋區銀座西二ノ一
立命館大學出版部
電話京橋五六〇六番
振替東京七五三六二番

凡例

一、本書は短歌にあらはれてゐる**助動詞・助詞・副詞・接尾語**の重なるものに就て、詳細な研究を遂げてゐるものである。

一、これから短歌をつくらうとする人は勿論、相當に歌の道に分け入つた者、或は日本文典の研究者にとつて短歌文法を正確に規則的に會得してをくことは最も緊要な焦眉の急である。

一、本書は殊に**助動詞**と**助詞(てにをは)**とに對して全力を傾注してある。これは短歌文法中この二品詞が最も必須缺くべからざる寶玉であるからである。

一、本書の研究手順は、まづ、助動詞・助詞・副詞・接尾語のそれぞれについて、その意義を定め、語源に溯り、用法を詳細に區分し、その語の歴史と將來の生命をも照明し、用法に從つて古今三千年にわ

たる短歌の中からなるべくすぐれた作品を例歌として示してある。

一、**例歌は實に二千首。** 口語の作品にも及んでゐるのである。これ本書がその一面に於て「**日本短歌一大選集**」の價値がある所以である。

一、本書は例歌を主とし、理論を從としてある。これは初學者にもその理解を早からしめるためで、例歌を反複愛誦さへすれば古來難解の稱がある短歌文法が、おのづから會得され得るのである。

一、本書の特色は現在の日本に於てこの種の類似書が一本も無いことである。眞に本居宣長の「詞の玉の緒」富士谷成章の「あゆび抄」と共に短歌文法研究の三大寶典の自信がある。

一、次の目次にも例歌を附して置いた。これは江湖の便宜を計る老婆心からである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

短歌文法七十講
例歌作者簿

い

生田蝶介
石川啄木
伊藤左千夫
石榑千亦
石井直三郎
今井邦子
石榑茂

は

今中楓溪
筏井嘉一
市山盛雄
岩谷莫哀
飯島富久子
半田良平
橋田東聲

に

西内瀧三郎
西部はじむ
細井魚袋
穂積忠

ほ

西村陽吉
馬場靜浪
橋本政一
濱口正雄
服部嘉香
羽田珠子
早川幾忠
花岡謙二
花田比露志
原阿佐緒

と

土岐善麿
本間樂寛
豐島逃氷

ち

豐島晃
富田碎花
富坂賢太郎
茅野雅子
良寛

り

尾上柴舟
尾山篤二郎
岡本かの子
岡麓
岡野直七郎
岡山巖
岡本文彌
尾崎孝子

を

わ

若山喜志子
渡邊保一朗
若林牧春
若山牧水

か

賀茂眞淵
香取秀眞
香川景樹
金子薫園
河野愼吾
川田順
片山廣子
神原克重
加藤增夫
金澤種美
金子靜聲
加納曉
川崎繁次郎
川崎杜外
吉植庄亮
與謝野寛
與謝野晶子

た

吉井勇
依田秋圃
横堀精一郎
米田雄郎
平忠度
田安宗武
田山花袋
高田浪吉
武耶里親夫
橘宗利
高草木暮風
土田耕平
土屋文明
築地藤子
對馬完治

な

中川小十郎
中村憲吉
長塚節
中河與一
中河幹子
並木秋人
中島竹雄
中島哀浪
中原綾子
中村柊花
内藤鋤策
仲郷三郎
永田龍雄
中村孝助
村野次郎
植松壽樹
宇都野研
上田英夫

氏家信
潮みどり
白井大翼
野澤柿葦

の

落合直文
太田水穂
大隈言道
大熊信行
大鳥居金一郎
小田切浪彦
大井廣
大谷吉正
小田觀螢

お

大久保月夜
大村由太郎
窪田空穂
楠田敏郎

九條武子
國井葭村
熊谷武雄
矢島歡一
山川登美子
安江不江
矢代東村
矢澤孝子
矢部道氣
山本亮
八重潮路
山中俊次

や

前田夕暮
正岡子規
松本仁
松村英一
前川佐美雄

ま

丸山芳良
松本昌夫
松田常憲
松岡貞總
松本松五郎
松本清
前田浩
藤澤古實
藤澤淳
布施政一
福郷笛聲
古泉千樫
小泉苳三

こ

古宇田ふみ
小瀧空明
小出桑
淺野梨郷

ふ

あ

安藤兼吉
青山宣紀
阿部静枝
阿部鳩雨
鐵京造

齋藤茂吉
佐々木信綱
西行

齋藤瀏
佐野翠坡
北原白秋
紀貫之
木下利玄
木下幸文
菊地知勇
菊池劍
菊池貞也

桐田蕗村
岸良雄
菊地庫郎
木村流二郎
由利貞三
結城牧秋
三木露風
源實朝
三浦守治
水町京子
三苫京子
三井甲之
三ヶ島葭子
三木九皐
島木赤彦
釋迢空
霜山譲

平福百穂
平賀元義
平井二郎
平岡清之
日比野道男
藻谷六郎
本居亮一
森田鐵之助
杉浦翠子
角鶴東
杉田星歌
須藤泰一郎
須藤克三

短歌文法七十講
古例歌出典

古事記
萬葉集
古今集
新古今集
續古今集
新後撰集
續千載集
土佐日記
後拾遺集
大和物語
伊勢物語
榮花物語
堤中納言物語
和泉式部集

枕草紙
家々集
日記草子歌集
無名草紙
狹衣
崇神紀
六帖
後撰集
後年遺集
拾遺集
詞花集
玉葉集
金葉集
千載集
新千載集
新勅選集
竹取物語

天智紀
允恭紀
金槐集
孝德紀
風雅集
齊明紀
續拾遺集
新後拾遺集
歷史歌集
躬恒集
落窪物語
神代紀
玉梓
右京大夫集
讃岐集
蜻蛉日記
山家集

著聞集
濱松中納言物語
元輔集
夫木和歌集
續詞花集
とりかへばや物語

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

短歌文法七十講

目次

第一講　ぬ（助動詞）……一頁

○A　法（完了時）……二頁

わが撞けば鐘めうめうと鳴りいでて湖上の雨は明るうなりぬ　（生田蝶介）

○B　法（否定）……四頁

しばしばも相見ぬ君を天の河舟出早せよ夜のふけぬまに　（萬葉集）

第二講　つ（助動詞）……六頁

黄にまろきをさな童の日の居處靄はふかしと舟ゆあふぎつ　（北原白秋）

第三講　ぬとつとの用法上の差別……八頁

第四講　つつ（助詞）……一〇頁

○A　法（第五句末にありて、存在、進行、繼續）……一〇頁
朝靄はむらさきふかしみちのくのこのしづけさを桐は咲きつつ　（生田蝶介）
さ夜ふけて春の夜ふけしひもじさに乳のあぶらを麵麭にぬりつつ　（齋藤茂吉）
やどりせし人の形見か藤袴忘られがたき香に匂ひつつ　（紀　貫之）

○B　法（第五句末にありて上方に連接すべき用言を擁す）……一三頁
少女子やふふめる花のうす紅きおのが乳見居り何か言ひつつ　（吉植庄亮）

○C　法（第五句末以外に位置を占め同一動作の反復、繼續、存在、進行を示す）……一五頁

△甲　部（第一句のつつ）……一六頁
語りつつあぐる瞳に夕凪の海はいつしか月夜となれり　（生田蝶介）

△乙　部（第二句のつつ）……一七頁
秋さらば見つつしのべと妹が植ゑし屋前の石竹咲きにけるかも　（萬葉集）

△丙　部（第三句のつつ）……一八頁
天の河淺瀬白浪たどりつつ渡しはてねば明けぞしにける　（古今集）

△丁　部（第四句のつつ）……一九頁
ことしげくわがあけくらすたまたまにしのびつつぬむひとの笑まひを　（松本　仁）

△戊　部（第五句のつつ）……二〇頁

關守は改まるてふあふ坂のゆふつけ鳥はなきつゝぞゆく　（後撰集）

第五講　む（助動詞）……二二頁

○A　法（現在の想像）……三三頁

夜となりて谿ほのぼのと青めるは月かもあらむ山のあなたに　（生田蝶介）

○B　法（未來の想像、希望）……三三頁

れがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ　（西行）

第六講　も（むの變形）……二五頁

人もがな見せも聞かせも萩が花咲く夕かげのひぐらしのこゑ　（千載集）

第七講　まく（むの延音）……二六頁

わが宿の梅の下枝にあそびつゝ鶯なくも散らまく惜しみ　（萬葉集）

第八講　けむ（助動詞）……二八頁

○A　法（過去推量）……二八頁

△甲　部（動詞・助動詞に附く）……二九頁
古にありけむひともわがごとや三輪のひばらにかざし折りけむ　（萬葉集）
△乙　部（助詞に附く）……三〇頁
あめつちの光のうちに塵となり散りにけむかもあはれ母刀自　（窪田空穗）
○B　法（未來推量）……三三頁
赤駒のいゆきはばかるまくすく原何のつてごとただにしえげむ　（天智紀）
第九講　らむ（助動詞）……三三頁
枕とていづれの草にちぎるらむゆくをかぎりの野べの夕ぐれ　（新古今集）
第十講　ぬらむ（助動詞）……三七頁
わが家の犬はいづこにゆきぬらむ今宵も思ひいでて眠れる　（島木赤彥）
第十一講　らし（助動詞）……三九頁
夕かけて若葉の冷えやまさるらしもはやしづくとなりそめにけり　（尾上柴舟）

第十二講　らむとらしとの差別……四一頁

第十三講　たり（助動詞）……四二頁

○A　法（繼續、存在）……四三頁

年まねくこもりすむなる豐島野に春さりくれば花の咲きたり　（尾山篤二郎）

○B　法（完了、過去）……四三頁

ほととぎすつひにききたり山かひの夕べをみだす雲の明りに　（松本　仁）

○C　法（AB合法）……四四頁

和ぐもり雨ふりやみし道のべにかれ草のいろぬれて垂りたり　（中村憲吉）

○D　法（指　定）……四五頁

飯岡いでて猿田松岸匂配にかかりて汽車の歩み遲々たり　（生田蝶介）

十四講　き（助動詞）……四六頁

船なりき春の夜なりき瀬戸なりき旅の女とくみしさかづき　（若山牧水）

第十五講　し（きの變形）……四九頁
兎の子馴れて來つるをあそばせで日向たのしく今日もありへし　（吉植庄亮）
第十六講　けり（助動詞）……五一頁
○A　法（過去）……五一頁
かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを　（古今集）
○B　法（感嘆）……五三頁
春の日の光のままにわがあればわが命こそたうとかりける　（佐々木信綱）
第十七講　けりときとの差別……五四頁
第十八講　たりけり（助動詞）……五五頁
常陸野の鴨に羽前の餅を入れて多摩野の青葉浮かしたりけり　（生田蝶介）
第十九講　せり（助動詞）……五六頁

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo